史の杜

FUMI NO MORI

TOHOKU UNIVERSITY

東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門ニューズレター

8

CONTENTS

- **地域との歩みのなかで**　仙台藩・地方知行制を考える
- **古文書のひろば①**　相続をめぐるある農村女性の不遇と苦闘
- **古文書のひろば②**　女子神学校の旧仙台藩出身の教師たち
- **調査の現場から**　伊達家墓所と向き合って　塩沢家文書調査に参加して　古文書撮影実習に参加して
- **上廣歴史資料学研究部門2019年度の活動**

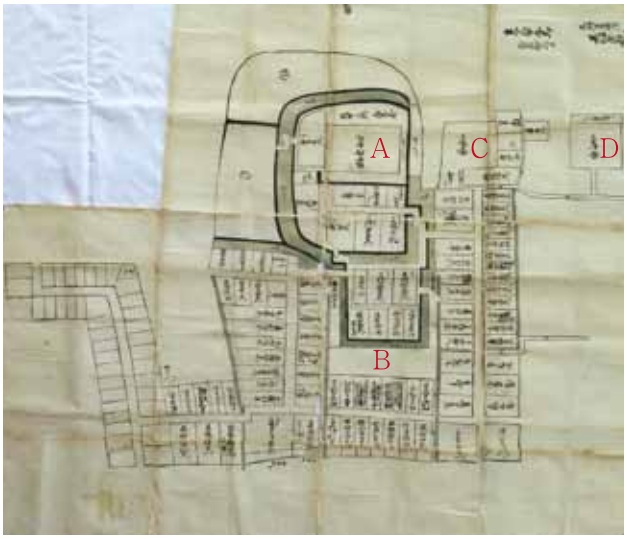
地域との歩みのなかで

仙台藩・地方知行制を考える

上廣歴史資料学研究部門では、今年度よりスタッフ全員で調査先をはじめとする地域のフィールワークを実施しております。これまで県内では遠田郡美里町や加美郡加美町のほか、山形県東根市、上山市などを訪問しました。地域の方にご案内をいただくことで、私たちだけでは知り得ない情報を得ることができます。また、文化財保護法改定にともなう文化行政の変化への対応や住民の方々と連携した新たな活動など、現場での取り組みに学ぶことが多くあります。以下、この経験で学んだことを、私の研究関心である地方知行制の観点から述べたいと思います。

江戸時代、多くの大名家の家臣が御蔵から現物米を支給される蔵米知行制（くらまいちぎょうせい）に移行していく中で、仙台藩をはじめ薩摩藩、佐賀藩などは知行地を与えられた家臣が自身で年貢を徴収する地方知行制を幕末まで継続していました。仙台藩の地方知行制で興味深いのは、「要害」「所」「在所」といって家臣の拝領屋敷の周辺に下中（家中とも、陪臣）屋敷や寺屋敷、足軽屋敷、町場などを併せて拝領する形式をとっていたことです。したがって、仙台藩領の各地には、下中屋敷に住む陪臣が多く存在しており、その数は2万4000人ほどともいわれ（『仙台市史』通史編3・近世1、254頁）、城下町でなく在地にも多くの武士が生活していました。

こうした地域のありようは、当時の絵図資料をみることによってわかります。たとえば、坂元要害（現山元町）を拝領した大條家の寛永19年（1642）「坂本城御家中図」（写真1）をみてみましょう。堀で囲まれた「坂本城本丸」とある周辺に（図中A）、98の下中屋敷が配置され（図中B）、本丸の西側には金蔵寺（図中C）と徳本寺（図中D）という寺屋敷があります。これに町場が加われば、一見、小さな大名家の城下町のようにも見えます。



●【写真1】坂本城御家中図（山元町歴史民俗資料館提供）

しかし、陪臣が居住する下中屋敷は、いわゆる城下町にみられる漆喰の白い壁で囲まれた武家屋敷とは趣を異にします。「在所」を拝領した仙台藩重臣・奥山家の家老職である松本家住宅（加美郡加美町、国指定重要文化財、写真2）は、在地に居住する陪臣の生活を考える上で貴重な文化財です。さらに興味深いのは、現在、この建物内には地域の方が作成した「伊達家家臣・奥山大学公いにしえの城内・散歩道」と題した案内図が設置され、明治8年(1875)頃の家並みが描かれていることです（写真3）。案内図には、「奥山家旧城下町」とあり、奥山家の下中屋敷の配置の面影を重ねることができます。また、仙台藩宿老･後藤家の不動堂要害周辺（美里町）では、いまも下中屋敷があった場所に陪臣のご子孫が居住されていることが多く確認できるようです。

●【写真2】松本家住宅（2019年7月10日巡見時撮影）

このように地方知行制に規定された地域社会のありようを意識しながらフィールドワークをしていると、要害跡や菩提寺などに「地域の領主」に関連する記念碑を見つけることができます。たとえば宿老・後藤家の菩提寺である皎善寺（こうぜんじ）には「藩祖公三百五十年祭記念碑」があります。この石碑には「昭和三十八年十一月二十八日奉修」と刻まれており、同年(1963)同日に催された「初代領主後藤肥前信康公三百五十年祭」と関連したものです。記念碑の主催者が後藤家に対して「藩祖公」という意識をもっていたことは大変興味深いです。こうした「地域の領主」の知行地入封や没後を記念して開催される行事や刊行物出版は他にもたくさんみられます。

●【写真3】「伊達家家臣・奥山大学公いにしえの城内・散歩道」（2019年7月10日巡見時撮影）

部門では、今年度、美里町や加美町教育委員会と連携し、後藤家文書や奥山家文書の調査を進めることができました。それぞれ仙台藩の武家社会に関する文書が多く残されているわけですが、同時に家臣の文書が地域の歴史を解明する上で重要な資料になることを認識しました。大條家文書の記録からは、絵図ではわからない下中屋敷の所有者や地名の変遷を追うことができます。仙台藩の武家文書を調査することの魅力は、現代にもその痕跡が残されている地域の歴史を知る重要な手立てとなることです。つまり、地域史（生活文化）の視点から仙台藩・地方知行制の研究を構築できるのではないでしょうか。今後、こうした魅力ある地域と連携を図りながら、この課題の可能性を追究していきたいと思っております。

（野本禎司）

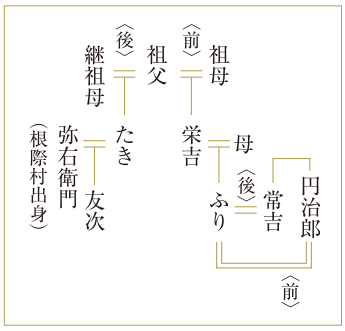
古文書のひろば 1

相続をめぐるある農村女性の不遇と苦闘

江戸時代後期、出羽国村山郡は複数の領地が入り組んでいました。そのなかで下宝沢村（現山形市）は、佐倉藩堀田家の飛地領約4.1万石を構成する一村でした。同村の名主を輩出した會田家の古文書は、現在山形大学附属博物館に寄託されています。

嘉永2年（1849）の「万手扣」は、會田家当主が締役を務めるなかで作成した手控えです。締役とは、飛地領村方全体の代表者である割元の補佐役で、領内の名主から任じられました。本史料には、領内の人々からの上申や、柏倉陣屋（堀田家の出張所）からの指示などが書き留められています。史料からわかることの一例として、領内の滝平村（現山形市）「ふり」という女性をめぐる一件を紹介します。

ふりが陣屋に提出した願書によると、28年前、継祖母の意向で叔母・たきに婿（弥右衛門）迎えて家督をとらせ、父・栄吉を別家させました（系図参照）。これを心外に思ったためか、栄吉はのぼせたようになってたびたび家を空けるようになってしまいました。翌々年、ふりは本家（弥右衛門家）へ引き取られましたが、いずれは別家で栄吉と住むことを望んでいました。ところがその後、祖父の反対にもかかわらず、弥右衛門は栄吉不在の別家を売却してしまいました。栄吉が戻ると、立腹して弥右衛門と種々やり取りしますが状況を変えられず、米沢領小松（現米沢市）で借宅暮らしをしたのち病死します。ふりは弥右衛門から、別家筋にあたる円治郎との縁組を勧められ、「拠無き儀とあきらめ」（読み下し、以下同じ）19歳で嫁ぎました。本家から与えられたのは衣類・手道具のみで、栄吉に配分されるはずだった財産や、別家売却代金も渡されませんでした。嫁ぎ先の生活は苦しく、顔色をうかがいながら弥右衛門に財産の件を申し出ても、取り合ってもらえませんでした。嘉永2年4月には、本家下女に関して問題があり、たきから頼まれて対応したところそれがよくなかったとかえって恨まれ、閏4月には弥右衛門忰・友次から強く打擲されました。無念をこらえて円治郎家に戻ると、「実家において畜生同様の始末」にあった者を家に置けないとして、離縁を申し渡されます。名主のとりなしにより7月末までは円治郎家に住み、その後はやむを得ず、子を連れて本家の厄介となります。妊娠中のふりは心痛がやまず、財産の配分を受けて粗末でも別宅を建てて暮らしたいと申し出ますが、弥右衛門が聞き入れなかったため、出訴に至ったとしています（9月）。訴えを受けて関係者が陣屋に呼び出され吟味が始まりますが、結果的には10月に内済（和解）が成立します。その内容は、ふりが弥右衛門から金20両と田地（作徳米6俵）を譲り受け、円治郎弟の常吉と再縁するというものでした。



●【図1】ふりの系図

願書のなかでふりは「家督をも取るべき血脈之私」「（弥右衛門が）私を女性と侮り」などと述べています。度重なる不遇に加え、家意識や女性の観点からも、ふりが悔しさを抱いていたことがわかります。

飛地領全体の案件が記録された「万手扣」からは、領主と村の表向きの事柄に限らず、ふりのような特定の人物の人生や意識までもが垣間見えることがあります。貴重な史料と考え、現在筆者が講師を担当している自主サークル・片平古文書会でテキストとしています。会員の皆さんと解読を進めながら、当該地域の分析から当時の社会の考察へとつなげていく所存です。

（藤方博之）

●【写真1】「万手扣」（嘉永2年）
會田家文書（山形大学附属博物館寄託）

●【写真2】片平古文書会での解読作業

古文書のひろば 2

女子神学校の旧仙台藩出身の教師たち

2019年9月28日に開催された第3回「みちのく歴史講座」（センター主催、部門企画運営）でのご講演内容をもとに、講師の佐藤和賀子先生にご寄稿いただきました。（編集）

東京都千代田区神田駿河台にある東京復活大聖堂は、建設から7年を経て完成し、1891年（明治24）3月8日に成聖式がおこなわれました。聖堂はニコライ堂と通称されましたが、ニコライ自身は自分の名前が聖堂に付けられることを好まなかった、と伝えられています。

ニコライは聖堂を建設する前に、男子の神学校（1897年正教神学校に改称）と女子神学校を設立しました。東京都公文書館にある学務文書によると、両校の創立は共に1883年です。女子神学校は「神学校」の名前を付していますが、女子伝教者の養成機関ではありません。卒業生は伝教者の妻や母校の教師になりました。

「女子神学校設立開申書」には在学四年、定員八十名、生徒学力は「高等科小学卒業ノ者」、授業料は無料、寄宿費は月額五円とあります。「生徒訓誡」によると女子神学校は「婦道」「貞操」「女徳」を重視しました。

ニコライは日露戦争の時も日本にとどまり、1911年7月16日にニコライ宣教50年を記念する祝典が行われました。その翌年1912年2月16日に、ニコライは永眠しました。女子神学校の元教師中井終子（なかいしゅうこ）が記した「東京女子神学校概要」（『女子神学校　正教女学校　出身者名簿』）によると、廃校年月は「大正十二年九月（関東大震災ノ為）」とあります。

1899年11月1日付で、女子神学校が在職教員の名前を東京府知事千家尊福（せんげたかとみ）に届けた文書【写真1】が、東京都公文書館に所蔵されています。この資料から仙台藩出身の佐藤秀六（さとうしゅうろく）（校長）、金須嘉之進（きすよしのしん）（唱歌担当）、白極良（はくごくりょう）（裁縫担当）の名前が確認できます。

佐藤秀六（1839～1911）は仙台藩校養賢堂で学びました。ハリストス正教徒になった秀六は自由民権運動に関わり、ハリストス正教徒の小野荘五郎が中心になり発行した雑誌『講習餘誌』に「人性ノ権」等の論考を寄稿しています。1878年にハリストス正教会の司祭に叙せられ、女子神学校が開校すると初代校長に就任し、死去するまで校長を務めました。1898年に『正教手引きくさ』を著しています。

宮城県はハリストス正教徒たちが度々集会を開いていることを危険視し、1872年2月に信者を一斉逮捕しました。逮捕者のなかには金須嘉之進の実兄中川操吉と、後に操吉の妻になる涌谷つるも含まれていました。キリスト教禁制の高札が撤廃されるのは、翌年2月でした。操吉が西南戦争で戦死した後、つるは1887年仙台に身章私塾を開き、女子教育に貢献しました。

金須嘉之進（1867～1951）は正教神学校で7年間学んだ後、ロシアのペテルブルグに留学し音楽を学び、

●【写真1】女子神学校が東京府知事に提出した文書（東京都公文書館蔵）

●【写真2】旧仙台市立荒浜小学校の校歌の額（震災遺構仙台市立荒浜小学校に展示されている）

帰国後、正教神学校と女子神学校の教員になりました。この頃、ハリストス正教徒の金須正平とみわ夫妻の一人娘みさほの婿養子になり、金須姓になりました。宮城県石巻高等女学校（現、宮城県石巻好文館高等学校）、荒浜尋常小学校（旧仙台市立荒浜小学校、2016年3月31日閉校）【写真2】等の校歌を作曲しています。

白極良（1845～1910）は1879年10月に、松操私塾の「裁縫上等科全科」を前述の涌谷（中川）つる等と共に卒業しました。この時、良は乳飲み子を抱える寡婦でした。松操私塾は1879年1月に朴澤三代治が当時の仙台区良覚院丁に開設した裁縫塾です。朴澤三代治は近代教育に適した裁縫教授法を探求し、授業では自ら作成した掛図を使用し、実習では実物を縮小した作品（雛形）を制作させる等の工夫をしました。

白極良は1885年に息子兵吉を連れて上京しました。最初、彼女は生徒として女子神学校に入学し、その後、裁縫教師として女子神学校に勤務しました。良は松操私塾で学んだ雛形による教授法を女子神学校でも取り入れています。ニコライ日記（1910年2月16日）には「聖堂で老女教師白極の葬儀と埋葬を行った。女学校で長い間勤めてくれた」とあります。

一人息子の白極兵吉（1878～1936）は宮内省主馬寮技手や学習院馬術教官を務めました。白極良の弟白極誠一も正教徒で、自由民権家であり、仙台の培根小学校（現、仙台市立木町通小学校）の校長になりました。

ニコライの女子教育を全面的に支えたのは菅野秀子（1821～1899）です。秀子の父は仙台藩の医師菅野淡水で、妹は前述の金須嘉之進の養父金須正平の妻みわです。菅野秀子は婿養子の医師菅野東水が死去し、幕末の動乱のなかで財産を失い、父淡水も亡くなった後に、三人の息子と共に上京しました。秀子は女子神学校の舎監でしたが、実質的には女子神学校の校長の役割を死の間際まで果たしていました。ニコライは秀子に全幅の信頼をおき、秀子が病臥すると、ニコライは彼女の体調に一喜一憂し、その心情がニコライ日記に記されています。晩年、秀子は息子二人を戦死や病死で失いました。秀子の葬儀をおこなったのは、後に女子神学校の二代目校長になる児玉菊子と大阪で医師になった長男虎太でした。

女子神学校は、寡婦になった旧仙台藩の女性たちが、経済的に自立するための職場になりました。また、仙台に女子の中等教育機関が少なかった明治前半には、宮城県の正教徒の女性たちにとって、東京の女子神学校は中等教育の進路として重要な役割を果たしていました。

本稿執筆にあたり仙台ハリストス正教会のセラフィム大主教様から資料のご提供をいただきました。

（追記）本稿は、拙稿「明治期ニコライ堂の女子神学校と宮城の女性たち」（『東北学院大学　東北文化研究所紀要』49号、2017年）に基づく講演内容を再構成しています。

（仙台白百合女子大学非常勤講師　佐藤和賀子）

調査の現場から

伊達家墓所と向き合って

●【写真1】無尽灯廟（仙台市太白区茂ケ崎）における石灯篭調査（2017年）

片平古文書会（部門が講師を派遣）のメンバーである本間市郎さんたちが、伊達家墓所の石造物調査に取り組まれました。報告書刊行までの軌跡をご紹介いただきます。（編集）

仙台市中心部を流れる広瀬川の右岸に、大年寺山（標高105m）という山があります。藩政時代、仙台藩を治めた伊達家の菩提寺・臨済宗黄檗派（黄檗宗）の大年寺が、大伽藍を構えていた所です。その頂上東側の平たん地に位置するのが同家墓所の一つ、無尽灯廟です。廟には、4代伊達綱村ら藩主4人と、各正室3人の墓碑が立ち、親族や有力家臣が献じた石灯篭が多数並んでいます。

同廟は、2011年の東日本大震災など、地震のたびに倒壊、損傷し、元に戻す作業が繰り返されてきました。筆者は、東北大学の先生による市民講座・片平古文書会の会員で、伊達家御廟大年寺会という奉仕団体にも属しています。廟を長年清掃して気付いたのが、墓碑や灯篭の傷みや風化。灯篭の献上者氏名が読みづらくなったものが目立ち、記録に残す必要を感じました。大年寺会の有志と思いが一致し、綱村300年遠忌の前年に当たる2017年8月、古文書愛好家を交え総勢7人で調査を始めました。

廟の規模は、墓碑7基と灯篭95基、手水鉢1組。足繁く通い、刻まれた文字や家紋、印章を皆で何度も見直したり、文献や字典類を参照したりして逐一判読しました。勢いで、一同から出版化の声が上がりました。約120人の経歴や逸話、人間関係を要約し、写真と図版を付けて『大年寺山・伊達家　無尽灯廟の墓碑・石灯篭等調査報告』の原本を1部製作しました。A4判117頁で全部手作りです。業者に複写を頼み、2018年5月第1刷75部 を、2019年5月には、藩主らの肖像画（仙台市博物館蔵）を加えて第2刷85部を、それぞれ自費出版しました。

墓碑と灯篭の配置を見ると、双方の位置関係は必ずしも整合性がありません。綱村の墓碑から遠く離れた個所に献灯者の灯篭があるなど、疑問点も浮かびました。家臣が連名で献じた灯篭の名字の序列は、時代によって変わっていることも分かりました。

本は、宮城県内の主要図書館、大年寺山周辺の学校に寄贈しました。県外から問い合わせや東京の研究所から視察を受けるなど、反響に驚いています。墓所を管理する仙台市と、伊達家18代当主桒宗氏の協力のお陰であり、同市市民文化事業団の助成、大年寺や専門家の支援にも感謝します。今後も地域の文化財を調べ、次代に伝えるよう努めます。

（大年寺山伊達家無尽灯廟調査会代表 本間市郎）

●【写真2】調査会メンバーのうち片平古文書会とかけもちの方

塩沢家文書調査に参加して

部門では、加美町教育委員会と共同で塩沢家文書の調査に取り組んでいます。ご一緒している菅原綾香さんに、参加記をお寄せいただきました。（編集）

2018年12月より加美町下新田・塩沢家文書の調査が始まり、上廣歴史資料学研究部門とともに、私も微力ながら参加させていただいています。当初着手した史料のほかに、調査を進める過程で、戦時中に仙台のご親戚宅から移されたと思われる史料群が蔵の中から見つかりました。

私が史料調査に参加するのは初めてではありません。大学在学中に東日本大震災が発生し、宮城歴史資料保全ネットワークの被災資料レスキュー活動や史料整理作業に1年半程参加させていただきました。私の専攻は古代史ですが、活動への参加が古文書の解読や史料保全に興味を持つきっかけになりました。卒業後、自治体の臨時職員として部門のお世話になる機会もありましたが、またこうして調査に参加できることに深いご縁を感じています。

塩沢家は仙台伊達家家臣の家柄で、下新田には在郷屋敷があったそうです。長い間開かずの蔵にあった史料の保存状態は様々で、中には破れたものやカビでページを開くことができないものもあります。一点一点の状態に気を配りながらの撮影作業は大変ですが、後世へ伝えるために大切な作業だと痛感すると同時に、どのような歴史が紐解かれるのか楽しみにしながら参加しています。今後も部門と協力し、所蔵者さんの気持ちに寄り添った保存ができればと思います。

（加美町教育委員会生涯学習課文化財係主事 菅原綾香）

●塩沢家文書調査

古文書撮影実習に参加して

後藤家文書の調査着手をきっかけとして、2019年9月に美里町教育委員会主催の古文書撮影実習が実施され、部門スタッフが講師を務めました。実習に参加された扇明美さんに、ご感想をお寄せいただきました。（編集）

江戸時代に不動堂邑を拝領した後藤家初代信康は武勇に優れ、仙台藩祖政宗の重臣として活躍した人物です。その子孫は伊達家の信任厚く宿老の家格に列せられて、たびたび藩の奉行職に任ぜられるなど、後藤家は藩政の中心的役割を担った家柄でした。

長らく仙台市博物館に寄託されていた「後藤家文書」を遠田郡美里町では所蔵者の許可をいただき、調査、解読、データ保存を行うこととなり、私も当町の文化財保護委員という立場から古文書撮影実習に参加致しました（於、美里町近代文学館）。実習に先立ち野本禎司先生から古文書の保存活用の意義や、撮影の実技に係るカメラの仕組みや機材の説明を受けましたが、実習にあたっては短時間ということもあり、カメラの設置や撮影環境の選択や機材等のスムーズな設置には時間と経験が必要であると感じました。さまざまな状態の様式の異なる古文書を撮影する場合の大原則ともいえる、「千年後でも読める写真」であるためには「まっすぐに」、「しわをのばして」、「四隅もしっかり撮影」という基本的な作業の重要さを痛感致しました。この経験を今後に生かして、地域の歴史的資料の保存活用に貢献していければと思います。

（美里町文化財保護委員 扇明美）

●古文書撮影実習

上廣歴史資料学研究部門 2019年度の活動

古文書目録作成・撮影作業

加美町奥山家文書、加美町塩沢家文書、栗原市岩ヶ崎中村家文書、白石市渡辺家文書、白石市一條家文書、仙台藩宿老後藤家文書、南三陸町遠藤家文書（以上宮城県）、朝日町鈴木清助家文書（山形県）、須賀川市小針家文書、須賀川市佐藤家文書、須賀川市桑名家文書（以上福島県）

古文書・歴史講座

通　年

- 岩出山古文書を読む会・岩出山教室（協力：部門、毎月2回、於大崎市岩出山地区公民館）
- 片平古文書会（協力：部門、毎月2回、於仙台市片平市民センター）
- 白石古文書サークル（協力：部門、毎月1回、於白石市中央公民館）
- 川北古文書学習会（主催：部門、前期・後期授業期間毎週1回、於学内）
- くずし字入門演習（主催：部門、毎月2回、於学内）

定　期

- 東北アジア研究センター春季古文書講座（2019年6月6日～7月11日、全5回、於学内）
- アメリカ・シカゴ大学「2019 Reading Kuzushiji Workshop」（主催：シカゴ大学東アジア研究所<CEAS>、協力：部門、2019年6月17～21日）
- 東北大学夏季古文書講座（主催：部門、2019年8月19～23日、於学内）
- 美里町古文書撮影実習（主催：美里町教育委員会、部門：企画運営、2019年9月4日、於美里町近代文学館）
- 東北アジア研究センター秋季古文書歴史講座（2019年11月7日～12月5日、全5回、於学内）
- 仙台市博物館くずし字講座「はじめての「くずし字」」（主催：仙台市博物館、共催：部門、2020年1月9～30日、全4回、於学内）

展示会

- 企画展「地域の歴史を知る　川崎町の近代―温泉・交通・災害―」（主催：部門、協力：青根温泉湯元不忘閣、川崎町教育委員会、2019年11月1～30日、於川崎町山村開発センター）
- 企画展「地域の歴史を知る　鎌先温泉の歴史と文化―一條家の調査から―」（主催：部門、協力：鎌先温泉時音の宿 湯主一條、白石市教育委員会、2019年11月24日、於白石市中央公民館）

講演会・セミナー

- 第2回みちのく歴史講座　渡辺尚志「江戸時代、出羽国村山郡の百姓たち」（主催：センター、企画運営：部門、2019年7月27日、於学内）
- 第3回みちのく歴史講座　佐藤和賀子「明治期ニコライ堂の女子神学校と宮城のハリストス正教徒」（主催：センター、企画運営：部門、2019年9月28日、於学内）
- 第4回みちのく歴史講座　髙橋守克「遺跡が語る！　宮城の災害の歴史」（主催：センター、企画運営：部門、2020年1月24日、於仙台銀行ホール イズミティ21<仙台市泉文化創造センター>）
- 第2回上廣歴史資料活用講座（主催：部門、2020年2月29日、於学内）

受　賞

- 平川新　仙台市特別市政功労者（2019年7月1日）

出　版

- 荒武賢一朗、高橋陽一編『東北アジア学術読本8　古文書がつなぐ人と地域―これからの歴史資料保全活動―』（東北大学出版会、2019年9月刊）

広　報

- 部門ホームページをリニューアルしました！（2019年11月28日）

東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門ニューズレター
史の杜 FUMI NO MORI 8

■発 行 日／2020年3月26日　■編集・発行者／東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門
■スタッフ／部門長（客員教授）：平川新　准教授：荒武賢一朗　助教：野本禎司　藤方博之
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地　Tel/Fax 022-795-3196　URL http://uehiro-tohoku.net/
■デザイン・印刷／株式会社 東誠社